

第6講 小中連携教育コーディネータ養成カリキュラム

【学習到達目標】

- ・小中連携教育コーディネータに求められる資質能力を説明できる。

1. 小中連携教育コーディネータ

小中連携教育コーディネータ養成の目的は、義務教育9年間全体を俯瞰する視点を持つことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続をめざす様々な教育を行うために、教科横断的な視点で学習内容を組み立てることができる幅広い理解に基づき、時代の変化に対応した総合的な指導力を身につけることにより、小中連携教育をコーディネートできる人材の育成や、その能力の向上を図ることである。つまり、小中連携にまつわる社会的な課題である教員の質の向上は、特に資質向上期の教員を対象に教員免許の併有を推進すると共に、国内外における学校教育の重要性についての認識を高め、学校教育の量の拡充だけでなく、質の向上を求める声を高め、新たな学びを創造する資質が教員にも求められていることの再認識をすることが必要である。ここでは、小中連携教育コーディネータ養成カリキュラムについて考える。

主体的・対話的な深い学びの実現は、全ての学校教育で継続して行っていかなければならない考え方である。主体的学びとはそのような場において、子供側が見通しを持って学ぶようにしていくことである。このことで、子供自身が振り返り、現在を理解し、今後を展望し、そこでの選択を広げる。

対話的学びとは自分の考えを表現し、また他者(学級の仲間や先人)の考えの表現を受け止め、それらの表現物を理解し、多面的なあり方を明確にし、そこから自分の考えを自覚的で課題解決へと進むものとしていくことである。さらに、深い学びとはそういった主体的・対話的なあり方を元にして学びつつ、その理解が教科等の見方・考え方へとつながるように発展することを想定して援助することで成り立つことである。

主体的、対話的、深い学びは互いに繋がり、循環しつつ学びを進めていくことになる。その指導とはそういったプロセスを展開させていくことであり、学習者もまたそういう学びの仕方を身に付け、教師なしの世界においてそのような学び方が使えるようにしていくことである。

主体的・対話的で深い学びとは新しい指導を授業実践において始めようという呼びかけではなく、既に行っているはずのそのような指導のあり方を見出し、より自覚的に指導に生かしていく

という意味で授業改善の視点である。

近年「往還型」と呼ばれる学校教育の研修の方式が急速に広がりを見せている。それは講義などの一斉（もちろんリモートでも）での情報提供をまず行い、それを受けて、受講者がそれぞれの現場で適当なテーマで実践を行い、それを再び持ち寄って話し合うということを重ねていくものである。授業をこういうように進めると良いという情報が実際の自分の現場でどう役立てて、自分たちの授業を改善していけるかが見えてきて、情報提供が意味のあるものとなっていく。

このやり方を今後、研修の主流としていくべきである。それは研修が教育実践の質の改善に役立ってこそ意味があるという本来の目的に照らして当然のことである。それをただ、研修した実践者の努力に任せておいては、その研修の成果はあまり現場の実践に有効に活用されることが少ないことも既に分かっている。

そこで、改めて研修の役割として改めて位置づけ直し、小中連携教育コーディネータを養成することを通じ、往還型の目指すところを大きく発展させていく必要がある。

この小中連携教育コーディネータの養成により、授業の実践においてその実践者が自らの授業を見直し、改善していくプロセスが成り立ち、そのプロセスをより良く動くようにしていくことが肝心であり、そのプロセスに対して参照すべき情報（教育リソース）を視点として提供するのが大学などにおける研修と位置づけ直すことが必要である。

2. 小中連携教育コーディネータ養成カリキュラム

小中連携教育コーディネータの目的を達成するために設定したカリキュラムは表 6-1 の通りである。同時に、このカリキュラムは中学校普通教諭免許となる免許状を取得した後、該当校種における教員として在職年数が、3年以上の方に小学校 2 種免許状を取得するために必要な科目ともなっている。

この小中連携コーディネータ概論に加えて 7 科目 12 単位 92 時間に岐阜県「教員のキャリアステージ」における資質の向上に関する指標 改訂版【中学校】における【基礎形成期】並びに【資質向上期】（令和 3 年 10 月）並びに本学独自に設定した資質・能力を加えた小中連携教育コーディネータに必要な資質・能力を次のように位置づけた。

表 6-1 小中連携教育コーディネータ養成カリキュラム

科目区分	科目名	授業形態	時間数
大学独自科目	小中連携教育コーディネータ概論	ハイブリッド型	15
各教科の指導法に関する科目 (5 科目 10 単位) (所有する全ての中学校教諭免許相当する教科を除く)	初等教科教育法 (国語) (書写を含む)	ハイブリッド型	15
	初等教科教育法 (算数)	ハイブリッド型	15
	初等教科教育法 (体育)	ハイブリッド型	15
	初等教科教育法 (音楽)	ハイブリッド型	15
	初等教科教育法 (理科)	ハイブリッド型	15
	初等教科教育法 (外国語)	ハイブリッド型	15
生徒指導の理論及び方法 進路指導及びキャリア教育の理論及び方法 (1 単位)	生徒指導論 (進路指導を含む)	ハイブリッド型	8
教育相談 (カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。) の理論及び方法 (1 単位)	教育相談 (カウンセリングを含む)	ハイブリッド型	8

3. インストラクショナルデザイン指導力

小中連携教育コーディネータの資質能力として本学が独自設定した資質・能力としてインストラクショナルデザイン指導力がある。インストラクショナルデザイン指導力とは、学習成果のエビデンスに基づく効果的な教育実践を幼児教育に普及できる指導力である。また、インストラクショナルデザインとは、「何を (What) できるようにするのか？」を明確にしたうえで、「どうやって (How) できるようにするのか」をルールに基づいて体系的に考えることにより、効果的・効率的・魅力的な教育プログラムを作成するための方法論である。

(1) インストラクショナルデザイン

情報化や国際化が進み、社会が大きく変化する中で、学校、そして教師は様々な変化に直面している。子供たちに求められる学力の変化や授業での ICT (Information Communication Technology) 活用など、教師はどう対応していけばよいのだろうか。ここでは「インストラクショナルデザイン」を手がかりに、効果的・効率的・魅力的な授業づくりや教材開発について考えていく。

インストラクショナルデザイン (ID : Instructional Design) の「インストラクション」は、教授や授業、指示を示す言葉で、授業設計や授業デザインと呼ばれることもあるが、以下の鈴木

(2005) の定義に「学習環境」とあるように、今日では広く捉えられている。

ID とは「教育活動の効果的・効率的・魅力的な学習環境をデザインしていくための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスのこと」(鈴木 2005)

またこの定義の中で「効果的・効率的・魅力的な学習環境をデザイン」とある。これはIDが重要視していることで、学習者が短時間で(効率的)、学習目標に到達し(効果的)、もっと学びたいという気持ちになる(魅力的)、そのようなよい授業やよい教材を目指せるよう、IDではさまざまな手法やモデルが提案されている。教員研修プログラムや映像教材を開発する際に、IDの手法やモデルを応用することで、「効果的・効率的・魅力的」を目指せるようになるのである。

(2) インストラクショナルデザインと教材開発

教材は、人が何かを教える際、あるいは人が学習する際に用いられるなど、身近なものである。しかし教材と一口に言っても、その範囲は広く、一つの問題を指すこともあれば、授業の単元やカリキュラムを指すこともある。例えば理科の実験器具を使って実験する方法を示した映像教材を開発する場合も、映像を使わずに理科の実験を含む単元を開発する場合も、いずれも教材を開発することであり、IDを応用することが可能である。

こういった教材を開発する際、IDでは、まず学習目標を明確にすることからスタートする。同時に、学習者はどのような状態になればその学習目標を達成したとするかー例えばテストやアンケートなどー達成度を測る方法を、あらかじめ決めておく。つまり、学習目標と評価方法を一致させておいてから、目標達成のための方法を検討することを、重要視しているのである。これらの整合性をとることによって「学習者に何を教えたいのか」「学習者に何ができるようになってほしいのか」ということからずれるのを防いでいるのである。

この考え方は、授業において、例えばICT活用を検討する場合も、有効であろう。「ICTをどう活用するか」を先に検討するのではなく、達成したい学習目標と評価方法がまず検討され、それを達成するための方法を検討する際に、ICTが選択肢として検討される、ということである。

(3) ADDIE

教材開発は、いくつかの段階に分けて進められる。図6-1に示した図は、IDプロセスの基本的な流れを示すものであり、5つの段階の頭文字をとってADDIEモデルと呼ばれている。分析・設計を行い、これに基づいて教材を開発し、実施し、評価を行いその効果確認をする、という流れをとる。改善が必要であれば、必要に応じてこのサイクルを繰り返す。このようにIDは、よりよい教材を目指す、システム的アプローチをとっている。

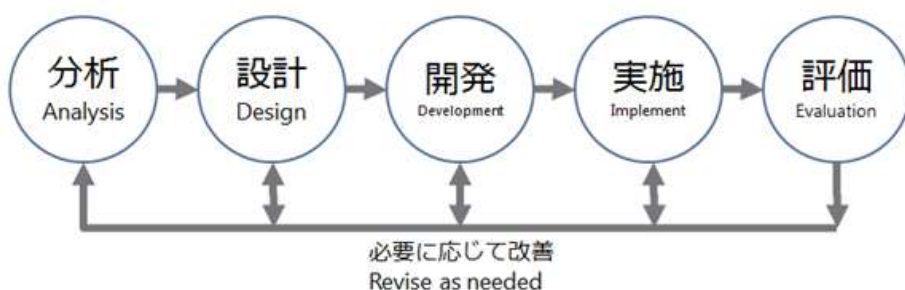


図6-1 ADDIE モデル

表 6-2 は、ADDIE の各段階で検討される内容である。学習目標を決めることの重要性は既に指摘したが、その学習目標や評価方法を設定するのは「設計」の段階であり、これらを決定するためには、その前の「分析」段階において、学習者の特性や教育内容を分析しておく。「学習者が何を学ばなければならないのか」や「学習者がどのような状態なのか」を把握しておくことが、学習目標の設定につながる。そして設計が終わると、これに基づいて教材を開発し、「実施」段階では開発した教材を実施する。そして「評価」段階で、その教材が学習目標を達成するのに役立ったかどうかを見定めるのである。

表 6-2 ADDIE 各段階における内容

Analyze（分析）	学習者の特性、教育内容を分析
Design（設計）	目標を設定し、インストラクションの手法を決める
Development（開発）	教材を作成する
Implement（実施）	実際にインストラクションを行う
Evaluation（評価）	教材が目標を達成するのに役立ったかどうか評価

以上、ID の基本的な考え方やプロセスを見てきた。本講で紹介した ID の考え方に基
づくと、たとえ教室のメディアなどが変わっても、あるいは求められる学力が時代ととも
に変化しても、常に学習目標と評価方法、達成のための方法を工夫していくことで、授業
をブラッシュアップさせる道筋が見えてくる。

【【講義】教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン】※）には、学習を支
援するはたらきかけ（ガニエの 9 教授事象）や、学習意欲を高めるための方略など、教育
活動を効果的・効率的・魅力的なものにするための理論やモデルが、数多く紹介されてい
る。これらを参考にしながら、普通の授業を振り返る観点としての活用をすることが重要



※）【講義】教材開発
の基礎としてのイン
ストラクショナルデ
ザイン

である。

課 題

1. 小中連携教育コーディネータに求められる資質能力を説明しなさい。
2. インストラクショナルデザイン指導力について具体例を挙げて説明しなさい。
3. インストラクショナルデザインを活用した授業改善について, 具体例を挙げて説明しなさい。

